

急速に進行する病と、「働きたい」願い 葛藤を乗り越え、地域で支える仕組みへ

専門分野に横ぐしを通す仕組み、重層的支援体制整備事業を实践する愛知県半田市社会福祉協議会（P.8-9）。
本稿では、同社協の専門職がチームとなって、Bさんの希望を叶え最期まで社会生活を送る支援をした事例を紹介する。知的障がいもち、地域に独居で暮らし、働き、頼れる身寄りのない中で急速に進行する病。増加する地域課題を象徴するようなこの事例をもとに同社協は、専門職だけでなく地域住民や企業など一体となり相談支援を強化する仕組みへと発展させようとしている。

● 専門知識が集結 チームで本人の希望を守る

—— 基幹相談支援センター、地域包括支援センター、権利擁護グループなどを擁する半田市社会福祉協議会。各部署が連携して、複合的な課題を抱える障がい者の支援もされています。本日は地域での対応の仕組み化を検討する布石となったBさんの事例をご紹介します。

加藤（センター長） 末期がんと診断された67歳の知的障がいのある女性、Bさん（図1）の支援をチームで支援しました。支援メンバーは、Bさんの計画相談を2年ほど担当していた相談支援センターの相談支援専門員の藤井優花と、看護師で地域包括支援センター（以下、包括）のケアマネジャーの奥村夕美、Bさんが1年ほど前に一人暮らしを始める際に居住支援法人として住まい探しを担当した権利擁護グループの上口美智代です。

—— 独居で就労継続支援B型事業所で働き、頼れる身寄りのないBさん。事業所で倒れ救急搬送されてからS状結がんが分かり、余命2～3カ月の末期の状態。皆さんが関わってから死後事務も含めたチームでの対応がはじまって2週間で再度入院、病院で亡くなりました。その2週間、検討事項が山積でした。

奥村（包括） 病気が分かって、すでに腰椎・肝臓に転移していることが分かり、搬送された総合病院が退院後の訪問診療の調整をしました。藤井相談員から今後の支援について包括に相談があり、看護師で医療的な知識があるケアマネジャーとして介入。ケース会議に同席させてもらって訪問の看護師から病状を聞き、予後が悪いと分



取材協力 ▶（後列左から）

加藤 恵さん 社会福祉法人半田市社会福祉協議会 事務局次長、同 半田市障がい者相談支援センター センター長

松本 涼子さん 同 地域ささえあいグループ グループ長 生活支援コーディネーター

藤井 優花さん 同 地域ささえあいグループ 生活支援コーディネーター（記事内の事例当時は、半田市障がい者相談支援センター 相談支援専門員）

（前列左から）

山本 篤史さん 同 半田市包括支援センター センター長 主任介護支援専門員 社会福祉士

奥村 夕美さん 同 半田市包括支援センター 看護師 介護支援専門員

上口美智代さん 同 権利擁護グループ グループ長 社会福祉士

かりました。身体状況から介護保険の利用の必要がある
と見立て、申請を急いで進めました。認定が下りた時に
そなえてサービス面では障がい福祉のほうで週1回、ヘルパーの家事支援を受けていたので、それを介護保険への切り替え、そして、入浴や着替えがままならなくなってきたと藤井相談員から聞いて、ヘルパーさんを増やす必要があるけれど、利用料金が介護保険にすると変わってくること、そして、契約も必要になるので、判断能力等の面で契約行為をどのように進めればよいかということを権利擁護グループの上口さんに相談しました。